

意味的側面から見た形容動詞と副詞との連続性

山 田 恭 子

1. はじめに

形容動詞は、数々の品詞との連続性が指摘されている。形容動詞が他品詞との連続性を問題にされるのは、形態的・意味的・統語的に類似性を持つものが複数存在するためである。形容動詞とは、意味的・統語的に、名詞、副詞とは主に形態的に重なるものがある。これまで品詞間の連続性は、寺村（1982）を中心に、形態面から分析が行われてきた。しかし、本稿では一貫して意味的側面からこの連続性を観察していく。これは、カテグリーがその構造を持つには、意味機能に何らかの理由・動機が存在する（上原2002）という認知言語学の視点に立脚したものである。本稿では、形容動詞と形態的に連続性を持つ副詞を対象として、分析を行う。形容動詞周辺の形態的連続性を持つ語の意味上の特徴をとらえることで、品詞間の連続性の一端を明らかにすることが本稿の目的である。

2. 先行研究

2. 1 形容動詞の位置づけと意味にかかわる先行研究

「形容動詞」という名は、形容的性質を持ち、動詞的な活用をする特徴から、芳賀（1905）が冠したものである。形容

動詞は、学校教育の文法体系では、活用する自立語である「一言」に含まれ、動詞や形容詞と同格に並べられるが、その地位は言語理論において絶対的なものとはいえない。ここで、まず形容動詞の日本語研究での位置づけを概観する。

現行の学校文法のもととなった橋本（1948）の文法体系では、形容動詞を語幹（「静かだ」の場合の「静か」と、活用語尾（「静かだ」の場合の「だ」）を合わせて一語相当とし、単一の品詞とみなしている。橋本は特に、文語文法との接続を重視し、形容動詞を一品詞として立てる必要性を説いた。しかし、形容動詞は活用の形態上、形容詞や副詞から脱しているものの、意味上で似かよう形容詞と分けて扱うべきかどうか疑義を呈しており、形容詞の低位分類に置く見方も示している。

時枝（1950）は形容動詞を単一の品詞と認めない立場である。時枝は、「静か」「丈夫」という語形の変化しない語（体言）に、指定の助動詞が付いたものにとらえ、「静かだ」は二語相当だとしている。寺村（1982）は、形容動詞を名詞と形容詞の中間的な位置にあるものとし、「名詞的形容詞」「名詞詞」と呼んだ。これは、時枝の形容動詞語幹を体言とする見方と、形容動詞を形容詞の低位分類とする他の論者の見方の折衷案と

いべきものである。村木(2012)は形容詞のタイプを3種に分け、形容詞・形容動詞・名詞とされてきた語類を「第1形容詞」「第2形容詞」「第3形容詞」とした。これらは規定用法・述語用法・修飾用法における語尾の形式で分類されると述べている。形容動詞を名詞類の下位区分に位置づけ、名詞類を大きく「体詞」に区分した加藤(2015)などの見方もある。

このように形容動詞の位置づけはさまざまに議論されているが、形容詞と形容動詞の意味に関しては、認知言語学の立場から見た研究に特筆するものがある。以下の研究は、形容詞と形容動詞の意味傾向を考察したものである。

Dixon(1977)は、典型的な形容詞の意味クラスとして、物が空間に占める寸法、物体の性質、色、人の性質、年齢、評価、速度の7つのクラスを示した。それに対し、Backhouse(1984)は、形容詞には上記の7つのクラスが見いだせるが、形容動詞には色、年齢、速度は存在しないと考察している。上原(2002)はこれらの研究をもとに、形容詞・形容動詞の類出語の意味分類を行った。この調査で上原はDixonの示した物体の性質を細分類し(硬度、形、重さ、温度、味、地形関係)、加えて、新たに9つのクラス(光、確定・必然性、必要性、運、技術、複雑さ、ファッション、分布・区別、対照)を設定している。表1に各研究者の意味クラスを示す。

形容動詞の意味にかかわる研究は他にも見られるが、三者の形容動詞の意味クラスは相応に体系化されており、計量的な分類に適している。二品詞の意味傾向の議論は他に譲るが、本稿では先の三者の意味クラスを援用し、分析を行うことにする。

表1：形容詞・形容動詞の意味クラス先行研究

Dixon (1977)		Backhouse (1984)		上原 (2002)	
形容詞	形容動詞	形容詞	形容動詞	形容詞	形容動詞
	寸法		寸法		寸法
	物体の性質		物体の性質		物体の性質
	色	色		色	
	人の性質		人の性質		人の性質
	年齢	年齢		年齢	
	評価		評価		評価
	速度	速度		速度	
				光	
				確定・必然性	
				必要性	
				運	
				技術	
				複雑さ	
				ファッション	
				分布・区別	
				対照	

2. 2 副詞の意味機能にかかわる先行研究

副詞は、動詞や名詞などとは異なり、命題の中核部分を形づくることはない。学校文法での規範的には用言(動詞・形容詞・形容動詞)を修飾し、連用修飾語としての機能を果たす。

副詞の意味をとらえる際に留意する条件として、西原(1991)は、副詞の意味内容は言語使用者の「自主的判断」で選択されることを挙げている。現実世界の様態、時間などを客観的に描写すると見られるものでも、その描写には話し手の判断が加わるとし、その判断の主観性には段階があると指摘した。

副詞の存在は論理構造にとって必要条件ではなく、発話主体の判断の基準で選択されるとして、次の例を挙げている。

(1) 運悪く上司と目が合ってしまった。

(1) は、副詞「運悪く」²⁾を省いても文が成立する。ここには「上司と目を合わせたくない」という話し手の思いが前提にある。それに反して「目が合ってしまった」ことへの話し手自体の判断として「運悪く」が選択されている。この例から副詞は、発話主体の認知する判断で、選ばれることがわかる。

また、副詞は文脈によって多義的になることも指摘されている(竹内1973、西原1991ほか)。例として、「ずっと」という語は文によって複数の意味機能を持つ。なお、以降、特に断りのない用例はすべて作例である。

- (2) ずっと励まし続けて、彼女はやっと立ち直った。
- (3) 空をずっと見渡すと、曇り始めていることに気づいた。
- (4) ずっと歩いて行くと遺跡が見える。
- (5) あの頃の彼は、今よりずっと優しかった。

以上に見るように「ずっと」は、(2)「時間の継続性」、(3)「空間の角度の広さ」、(4)「距離の長さ」、(5)「比較の程度の大さき」の意味機能を持つ。このような語は、一つの尺度を強調するものとして、すべて「程度」の意味に収めることもできるが、複数の意味機能を持つ語の取り扱いには検討を要する。

表2：副詞の意味機能の各研究者の分類

工藤 (2016)	益岡・田窪 (1992)	中右 (1980)	西原 (1991)	仁田 (2009)	高木 (1997)
情態 (様相)	様態	様態 場所	動作の様態 物の状態 空間	様態 結果	④動きや状態・程度の客体的特性を表す ⑧主体の自らの動作・状態に対する姿勢・意図・判断・評価
程度	程度 量	強意・程度	程度・尺度	程度 数量	
時・時間量 テンス	テンス・アスペクト	時・アスペクト 頻度	テンス・アスペクト(時) 頻度・期間	時間関係 頻度	⑨一般化された話し手によるABIに対する解釈・判断・評価
陳述 叙法 限定 (とりたて) 評価	陳述 評価 発言 その他	価値判断 真偽判断 発話行為 領域指定	態度の表明 真偽判断 価値判断 談話構成のストラテジー	話し手の態度・捉え方 評価 言表事態に対する捉え方 聞き手への促し	

副詞の体系は従来から多くの研究者に取り上げられている。表2に各研究者の副詞の意味や機能、体系のとらえ方を示す。「陳述」「テンス・アスペクト」など文法用語を用い、かつ比較的大分類で示されたものを左から、他の研究者との違いが顕著に見られる分類が右に続く。

副詞は動作や物の状態など様態を表す副詞、程度や量・尺度を表す副詞、テンス・アスペクトなどにかかわる時間関係を表す副詞、「陳述の副詞」と呼ばれる態度の表明や価値・真偽を判断する副詞の4つに大別できる。

工藤 (2016) の意味体系は、文法用語で副詞の意味構造が示され、他の論者が「様態」とする類を「情態」または「様相」とし、「陳述の副詞」には「叙法」(限定(とりたて)〈評価〉)という小分類を立てている。

中右 (1980) は、「命題」という概念を軸に副詞の分類を立てた。命題内容へのかかわりの有無

で、副詞を「命題内副詞」と「命題外副詞」に分けている。以降の研究では、副詞を命題とのかかわりで考えることが一般的になった。中右の分類の特徴は、「ここに・あそこで」などの「場所の副詞」の立項と、「陳述の副詞」の細分類である。これらの細分類化や、命題を基点に副詞をとらえた点は評価されるものである。

益岡・田窪（1992）は中右に準じ、命題にかかわる副詞を「述語修飾副詞」、モダリティを含む文全体にかかわる副詞を「文修飾副詞」としている。〈程度の副詞〉とは別に〈量の副詞〉があることと、「陳述の副詞」を、〈陳述の副詞〉〈評価の副詞〉〈発言の副詞〉に分けていることが特徴的である。

西原（1991）は、中右や工藤の体系をもとに意味機能を示している。句や節レベルも副詞と認めている点は、橋本文法と異なる。西原は先の研究と比較すると各項目の細分類化が際立つ。たとえば、「様態」の類を（人の外見、物の状態、性質・性情、状況、感覚）などに分けている。また、西原は副詞の複数の意味機能を踏まえ、同じ語でも複数の類に入れていく。副詞の多義性を考慮に入れ、かつ分類基準は精密である。

仁田（2002、2009）は、文は言語活動の所産であるとし、話し手が外在・内在的世界との関係で描き取った客体的な出来事や事柄を表した「言表事態」と、言表事態をめぐっての話し手の主体的なとらえ方および話し手の発話・伝達的態度のあり方を示した「言表態度」とから成ることを示した。「言表事態」は中右でいう命題、「言表態度」はモダリティに相当する。

これまで副詞は、述語モダリティとの関連でとらえられてきた。従来、モダリティには命題に対する階層性が認められている（北原1981、寺村1982、仁田1985、益岡1991ほか）。この日本語の文構造のモダリティと副詞との関連をより前面に出しているのが、高木（1997）である。高木は文の階層性をもとに、副詞の意味特徴にも階層性が見られると主張する。また、高木のとらえ方は個々の語を完全に一分類に分けず、他の階層にわたり意味をとらえる点で、西原と共通する。

これらの研究から、副詞の意味機能は各研究者で大きな相違はなく、様態の副詞、程度や量の副詞、時間関係の副詞、態度表明の副詞に分けられることがわかる。本稿の意味分析では、まずこの大別を行う。中右を起点に、以降の論者が細分類をしているが、呼称に差異があるのみで、想定する語群は大きく変わらない。このなかで、最も細分類しているのは西原である。このように細密な分類基準があれば、形容動詞と副詞の品詞間にある語の詳細な分析がかなう。

以上から、意味分析においては、副詞の意味を様態、程度、量、時間関係、態度表明に大別し、そこから西原の分類をもとに細分類する方法をとることにする。次節では、先に示した副詞の意味分類と形容動詞の意味クラスの相違を整理し、対象語を分析するための前段階に入る。

2.3 方法としての意味分類の再整理

形容動詞の分類は、上原（2002）の意味クラスをそのまま援用するのではなく、本稿の分析のために精緻化する。新た

に5つのクラス（心理状態、状況、事象の性質、位置・立場、程度）を追加し、〈フアッション〉（派手な、上品な）は〈物体の性質〉（人の性質）などに置き換えられるため、削除する。表3に上原と本稿の意味クラスを示す。前掲の表2を照合させると、形容動詞と副詞の意味機能には共通性が見られる。

表3：意味クラスの比較

上原 (2002)	本稿
寸法	寸法
物体の性質	物体の性質
硬度	硬度
形	形
重さ	重さ
温度	温度
味	味
地形関係	地形関係
色	色
人の性質	人の性質
年齢	年齢
評価	評価
速度	速度
光	光
確定・必然性	確定・必然性
必要性	必要性
運	運
技術	技術
複雑さ	複雑さ
ファッション	分布・区別
分布・区別	対照
対照	心理状態
	状況
	事象の性質
	位置・立場
	程度

橋本（1935）が、「情態の副詞は大部分は形容動詞となつて用言の一種となる」と指摘するように、〈様態（情態）の副詞〉は形容動詞と意味的に類似するものが多い。この点は、奥田（2014）、工藤（2016）ほか多数に同様の指摘がある。

形容動詞の意味クラスの〈状況〉（心理状態）には、「完全・危険」「虚ろ・不安」などが含まれるが、これらは西原の副詞の体系で〈様態〉とされる「きちんと・はらはら」「ほおっと・びくびく」と意味的に対応する。森田（2008）の定義を借用すると、〈様態の副詞〉には、動作・現象の程度のありようや動作・状態の進行・継続過程における様態を表すものがある。「完全に終わった」「きちんと終わった」のように、連用修飾するとどちらも述語動詞「終わる」の様態を具体的にしている。

このような意味クラスは他にもある。〈物体の性質〉（固め・高温など）、〈人の性質〉（陽気・勝手など）、〈事象の性質〉（円滑・無駄など）はそのもの持つ特徴を表すため、動作・状態のありようを示す「様態」に一見不相応である。だが、副詞にも「べたべた（物の性質）」「おっとり（人の性質）」「あっさり（事象の性質）」など意味機能が対応するものがある。いずれも、「ペンをべたべた塗る」のように、述語動詞をより詳しく説明するはたらきがある。また、〈速度〉（迅速・早めなど）、〈位置・立場〉（間近・逆など）も、〈様態の副詞〉の「はやく・せつせ」と「まっすぐ・ぎやくに」と意味的に重なる。様態の副詞は従来の指摘どおり、形容動詞と意味的に符合するものが多い。形容動詞の意味クラス〈程度〉の「十分・沢山」は、〈程度副詞〉にも含まれている。「程度」という名称からも合致するとおり、これらも意味的に重なりといえる。

〈評価〉（確定・必然性）〈必要性〉〈運〉〈複雑さ〉は、〈態度表明の副詞〉に相当する。これらの意味クラスに属する「適切・不正」「当たり前・正確」「不要・必要」「幸せ・不幸」「微妙・簡単」などの語は、物事に対する主体の判断や評価を含蓄する。これは、〈態度表明の副詞〉の「まあまあ・当然・たしかに・かならず・幸いにも・あっさり」などと比較しても、意味的に近い位置にあると判断できる。

残る副詞の大分類の〈時間関係の副詞〉は、形容動詞に対応するクラスがない。〈時間関係〉の語が形容動詞にほぼ見られないことは、形容動詞の程度性にかかわると思われる。形容動詞は、形容詞も含め、その語の内部に程度性を備えている（上

原20003、八亀20008、加藤20015ほか)。そのため、形容動詞は「その指摘はかなり適切だ」「今はもつと幸せです」のように〈程度の副詞〉を修飾できる。しかし、時間にかかわる語は品詞に関係なく、程度性を持たない。「*かなりまもなく始める」「もつと明日、仕事がある」などの例を見ても顕著である。形容動詞の意味の範疇に〈時間関係〉が存在しにくいのは、このような形容動詞の特質によるものだと考えられる。形容動詞の意味クラスで副詞の意味分類と対応が見られないものも存在する。〈寸法〉〈長い・大きめ〉〈色〉〈赤い・真つ白な〉〈光〉〈明るい・真つ暗な〉は、語として対応する副詞が管見のかぎり見られない。しかし〈様態の副詞〉は、動作・状態のありようを示し、述語動詞の様態をより具体的にさせる修飾語である。先の4分類も「ボールはフェンスを大きく越えた」のように述語動詞の様態を具体的にする機能を担う。そのため、この4分類は意味機能として〈様態の副詞〉と重なりと判断できない。同じ理由で、〈対照〉〈等しい・対等〉も語の対応は見られないが、物事に対する主体の判断や評価を含蓄する〈態度表明の副詞〉の意味機能に対応するといえる。

残りの〈年齢〉、〈分布・区別〉は、語でも意味機能でも対応が見られない。〈年齢〉には「若い」「幼い」などがあり、一見〈様態〉である。しかし、これらは人や動物など生物に修飾しやすく、動作には修飾しにくい。つまり、体言の修飾が本務になりやすく、連用修飾の形が限定的になりやすい。これは、「動作・現象の程度のありようや動作・状態の進行・継続過程における様態を表す」という〈様態の副詞〉の定義にそぐわない。

「若い」が連用修飾になる例として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では「見える／見られる」「なる／いる」が後接するものが見られる。これらはすべて補助動詞的であり、文中で「若く」が脱落すると補助動詞の係り先がなくなるため、不自然になる。〈様態の副詞〉は用言に情報を加えるはたらきをするため、省略可能である。しかし、「若く」は補助動詞的な語以外にも次の例があり、これらも「若く」が脱落すると不適になる。

(7) 荒れた生活のせいもあって実年齢より若く評されることはなかったが、(名倉和希『愛しい標的』成美堂出版2005)

(8) 高タンパク食品で、そのほかにも成人病の予防やからだを若く保つ働きがあります。(北山耕平『自然のレッスン』太田出版2001)

以上から〈年齢〉は、〈様態の副詞〉と対応するとはいえない。〈分布・区別〉のクラスは語によって〈様態の副詞〉に重なるものもある。「ばらばら・別々」などは「生徒はばらばら／別々に分かれた」というように、動作の進行過程における様態を表し、〈様態の副詞〉と合致する。しかし、「別」は様相が異なる。

(9) 会計を別にする。(10) 別の家を探したい。
(11) 別に何も考えていない。

以上の作例を見ると、(10)は連体修飾だが(9)と共通し

て後接の語に情報を付加する機能を担うため、〈様態の副詞〉的な性質を持つといえる。しかし、(11)は「特に」と類似した意味であり、工藤(2016)が示す「とりたて」の副詞に含まれ、『岩波国語辞典』(2019年第八版)でも「形容動詞」と別の項目で「副詞」と判断される。(11)は前の2例と意味も品詞も異なるといえる。そのため、「別」は〈様態〉だけとはいえない。副詞の意味機能から見ると、〈分布・区別〉は〈様態の副詞〉だけでなく、〈態度表明の副詞〉も兼ね備えていることになる。

形容動詞と副詞の意味対応を整理した結果を表4に示す。これらの対応関係の形態的な連続性への影響を次節で検討する。

表4：形容動詞と副詞の意味分類の整理

形容動詞の意味クラス	副詞の意味機能	
物体の性質	様態	
人の性質		
事象の性質		
心理状態		
状況		
寸法		
色		
速度		
光		
位置・立場		
分布・区別	態度表明 (価値判断)	
評価		
確定・必然性		
必要性		
運		
技術		
複雑さ		
対照		
程度		程度
年齢		該当なし
該当なし	時間関係	

3. 3. 形容動詞と副詞の意味分析

3. 1 対象と方法

本節では、形容動詞と副詞の間に見られる意味特徴を検討するための対象語と方法を述べる。対象語は、典型的な形容動詞・

副詞の語類に加えて、一方の品詞との形態的な連続性が認められている語を取り上げる。これは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス語彙表』の「短単位語彙表データ」から頻度の高いものを抽出した。このデータは「語彙素」という、辞書の見出しとして掲載される形で集計されている。「あんまり」「あまり」はすべて「余り」として集計される。対象語を表5に示す。

表5：形容動詞・副詞の対象語一覧

形容動詞	中間的	副詞
好き	非常	一寸
大切	確か	直ぐ
明らか	大変	勿論
奇麗	別	更に
完全	結構	最も
大丈夫	可成	一体
有名	同じ	はつきり
静か	余り	突然
素敵	沢山	是非
盛ん	直接	丁度

形容動詞の語は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で「形状詞(形容動詞語幹を指す)」と判定されたものから、連体修飾する際に、ほとんどの場合「一な」を後接して修飾するものを抽出した。副詞の語は、連用修飾が可能で、「一な」の後接が不可能であり、「呼応の副詞」ともされていないものを抽出した。中間的な語は、文脈によって形容動詞的にも副詞的にもはたらくものを抽出した。いずれも語種が偏らないように選んでいる。なお、多くの副詞研究は句や節の単位で体系化していたが、これらの副詞は、形容動詞との形態的な連続性を考える上では、意味を成さない。もちろん、句や節単位の副詞は、語単位にとられず、定型化していて、かつ連用修飾の構造を成す点では、副詞研究において、重要な役割を持つ。しかし、本研究では、副詞を文の成分と区別する姿勢をとり、これらを取り上げない。本稿の分析では、前節の意味の対応関係を踏まえ、対象語を

品詞にかかわらず〈様態〉〈程度〉〈態度表明〉〈時間関係〉に大別する。さらに、西原（1991）と本稿の分類をもとに、細分類を行う。対象語の意味の範囲は『明鏡国語辞典』（2011第二版）や『分類語彙表』を用い、精査した。西原や上原（2002）の分析で取り上げられていない語は、辞書の表記と筆者の内省で分類を選択した。

3.2 分析と考察

以上に基づいて整理した結果を表6、7に示す。表6、7から、3項目で異なる傾向を読み取ることができる。

典型的な形容動詞は、意味の大分類が総じて〈様態〉と〈態度表明〉である。一語が形容動詞の複数の意味クラスに属しているも、副詞の大分類の〈様態〉からは外れない。大分類が〈態度表明〉の語は、細分類で〈評価〉〈確定・必然性〉〈必要性〉に分かれ、一見すると主体の判断が強く出る語が多い。

典型的な副詞は、〈程度〉〈時間関係〉の語が存在している点で形容動詞の語類と異なる。また、大分類が〈態度表明〉で細分類が〈評価〉の対象語は見られない。〈様態〉の語も少なく、〈様態〉であっても他の大分類を兼任している。

中間的な語類は他の語類との違いが顕著である。まず、複数の大分類にまたがる、多義的な語が多い。そのうち、「非常」「確か」「大変」「別」「結構」「余り」はすべて〈様態〉の意味を持つ。加えて、典型的な副詞に見られた〈程度〉〈態度表明〉の意味を兼任している。「沢山」は、〈様態〉の意味を持たないが〈程度〉と〈態度表明〉の〈必要性〉の意味を兼ねている。これは

表6：対象語の意味分類一覧

形容動詞	大分類		中間的	大分類		副詞	大分類		細分類
	細分類	細分類		細分類	細分類				
好き	態度表明	評価	非常	①様態	状況	一寸	程度	最小の見積もり	
大切	態度表明	必要性		②程度	最大級の見積もり		直ぐ	時間関係	期間
明らか	態度表明	確定・必然性	確か	①様態	事象の性質	勿論	態度表明	確信	
奇麗	様態	物体/事象/人の性質		②態度表明	確認/確定		更に	①態度表明	時間的あとさき
完全	様態	状況	大変	①様態	状況/事象の性質	最も		②程度	最高級の比較
大丈夫	態度表明	評価		②程度	最大級の見積もり		程度	①程度	最大級の見積もり
有名	様態	物体/事象/人の性質	別	①様態	状況/分布・区別	一体	態度表明	疑問	
静か	様態	状況/人の性質		②態度表明	とりたて		①様態	視覚	
素敵	態度表明	評価	結構	①様態	事象の性質	はつきり	②態度表明	対応態度	
盛ん	様態	事象の性質		②態度表明	必要性		突然	時間関係	動作の様相
			可成	③程度	最高級の比較	是非	態度表明	依頼	
				程度	最大級の見積もり		①様態	密着度	
			同じ	態度表明	対照	丁度	②程度	過不足なし	
				①様態	事象の性質		③態度表明	比喩	
			余り	②程度	最低の比較		④時間関係	同時	
				①態度表明	必要性				
			沢山	②程度	多量				
				様態	空間				
			直接	様態	空間				

表7：対象語の意味分類の数値結果

意味分類	形容動詞	中間的	副詞
様態	5	7	2
程度	0	6	3
態度表明	5	5	6
時間関係	0	0	3
計	10	18	14
複数の大分類を兼任	0	7	3
単数の大分類のみ	10	3	7
計	10	10	10

数が少ないが典型的な形容動詞の意味に見られたものと一致する。また、〈時間関係〉の語が対象語には見られない。形容動詞の意味クラスに〈時間関係〉の対応が見られなかったように、典型的な形容動詞や中間的な語にも〈時間関係〉の語は存在しにくいという仮説が立てられる。

各語類の傾向として以上のことが読み取れたが、特筆すべきなのは「丁度」である。これは、副詞の4つの大分類すべてを満たす。以下が4つの大分類に即した「丁度」の用例である。

〈様態〉 密着度

(12) I M E ツールバーは、次のスクリーンショットに示すように、ワードのウィンドウの右下にちょうど収まる位置に移動して説明をしていきます。(大野恵太『これでわかるワード2002』エスシーシー2001)

〈程度〉 過不足なし

(13) 「追い風が吹いたら攻めろ」と言っても、いつもちょうどいい具合に追い風が吹いてくれるわけではありません。(高橋がなり『がなり流!』青春出版社2004)

〈態度表明〉 比喩

(14) ちょうどキーボードをはずして持ち歩くようになったものなので、どこでも原稿を書くことができるようになった。

(野口悠紀雄『超』整理法』中央公論社1993)

〈時間関係〉 同時

(15) 先週の今頃、ちょうど、コンサート真つ只中。(Y a h
o o ー プログ2008)

いずれも「ある基準に過不足がないようす」を示した用例である。「ある基準」が数量や時間的・空間的なものどれによるかで意味機能が変わる。これまでの傾向と整合させると、中間的な語に入りそうだが、「丁度」は形容動詞的なたらきはしない。これには、〈時間関係〉〈態度表明(比喩)〉の意味が関係すると思われる。典型的な形容動詞、中間的な語類に〈時間関係〉の語は対象語に存在しない。〈時間関係〉の意味によって、形容動詞的なたらきができないといえる。また、〈態度表明〉の比喩は「まるで」などが属する。副詞的な語と助動詞「ようだ」などが組み合わさって成るもので、形容動詞は比喩のたらきを持ちえない。これらの要因により、複数の大分類に属していても、形容動詞に即さない意味が含まれば、形容動詞的なたらきができないといえる。

西原(1991)の述べるように、副詞の意味内容は話し手の判断である「主観性」を伴う。どの副詞も根幹には主体(話し手)の主観性を含んでいる。西原はそのなかでも、判断の主観性には段階があることを指摘し、〈時間関係の副詞〉(直ぐ・突然)や〈程度の副詞〉(最も・一寸)は客観的尺度を当てはめて実証できるものだとし、〈態度表明の副詞〉(うっかり・さいわいにも)は主観的尺度によるものとするのが適当と述べている。〈時間関係〉〈程度〉の副詞よりも、〈態度表明〉のほうの主観性の段階としては上に位置するということである。〈様態〉の副詞にあたるものの指摘がないが、〈様態〉でもあり〈態度表明〉でもある「きちんと」は主観的・客観的尺度のグラデーシヨンのなかに位置すると思われる。

これは、「様態」に多く属する形容動詞の意味分類を困難にする。西尾(1972)と八亀(2008)は、形容動詞含め形容詞類は、全般的に評価性を帯びると指摘する。西尾ほかは、ここでの評価性を「話し手の主体的なかかわりの有無」とらえている。同じように、副詞の主観性も「主体のかかわりの有無」ととらえれば、形容動詞すべてに強弱はあれども主観性、つまり「態度表明」的な意味が含まれることになる。

ここで「素敵」を「態度表明」、「奇麗」を「様態」に分類したことに言及する。これらはどちらも話し手の主観性を含み、使用される場面も類似している。にもかかわらず、このように分類したのは、その判断の描写が瞬間的に行われるか否かが主観性の段階にかかわると思われたためである。池上(2003)は、話し手の主観性が顕現されるもつとも典型的な場合として、以下のように述べている。

〈いま〉という時点、〈ここ〉という地点に自らを位置づけた〔自己〕がその〈ところ〉と〈からだ〉を分離させることなく(つまり、自己同一性)を保ったままの姿で直接事象を体験し、その体験的な事態把握に基いて言語化する

つまり、〈いま・ここ〉という条件を欠くと、典型性が落ちるということである。ここでの要点は〈いま・ここ〉における体験という視点が主観性の段階にかかわることである。以下の作例でこの点を検討する。

(16) あの方は本当に素敵だ。

(17) あの方は本当に奇麗だ。

(18) オードリー・ヘプバーンは素敵だ。

(19) オードリー・ヘプバーンは奇麗だ。

(16) (17) は、どちらも不自然ではないが、(18) (19) では、「素敵」のほうがやや不自然になる。

「あの方」を主語とした(16) (17) では、〈いま・ここ〉で体験している〔自己〕から物理的に離れた位置にいる現時点での「あの方」と、〈いま〉から回想している過去の時点における「あの方」の二つの解釈が可能である。前者は「素敵」のほうが馴染み、後者は「奇麗」のほうが馴染む。そのため、文単体で見るとどちらを選択しても不自然ではない。

しかし、「オードリー・ヘプバーン」を主語とした(18) (19) では、〈いま・ここ〉の眼前にある「オードリー・ヘプバーン」ではなく、多くの場合、主体が(映画や画像などで)体験した過去の時点における「オードリー・ヘプバーン」を想起する。

〈いま・ここ〉における体験という要素が欠ける場面で、主観性の強い表現が不適になりやすいとすると、「素敵」は主観性が強く、「奇麗」は「素敵」よりも主観性が弱いということになる。そのため、「素敵」は客観的尺度に基づく「様態」を表しているのではなく、主観的尺度に基づく「態度表明」だととらえたほうが適切である。「奇麗」にも主観性(評価性)はあるが、その程度でいえば「態度表明」とするほど強く表れない。したがって、「奇麗」は「様態」の副詞と分類できる。

4. 形容動詞と副詞の意味分析のまとめ

以上、形容動詞と副詞の意味機能を踏まえて、二品詞の形態と意味の関連性を考察した。副詞と形容動詞の意味機能の先行研究をまとめ、双方の対応関係を整理し、対象語に反映させた結果、以下の4点が明らかになった。

- ① 形容動詞は〈時間関係〉の意味をほとんど持たない。
- ② 典型的な形容動詞は副詞の大分類の〈様態〉〈態度表明〉のみに属し、複数の大分類にまたがる語は見られない。
- ③ 中間的な語は〈様態〉に加え、〈態度表明〉〈程度〉の意味を兼任する多義的な語が多い。
- ④ 「丁度」のような複数の大分類に属する多義的な語であっても、形容動詞に即さない意味が含まれば、形容動詞的なはたらしはできない傾向にある。

本節では形容動詞と副詞の連続性を扱った。しかし、先の二品詞に限らず、品詞は相互に連続性が認められている(橋1973など)。そのため、今後も種々の品詞間の連続性を意味的側面と形態的側面の両面から分析する必要がある。

引用・参考文献・関連URL

池上嘉彦(2003)「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)」山梨正明他編『認知言語学論考No.3』ひつじ書房

1-49頁

池上嘉彦(2011)「日本語と主観性・主体性」澤田治美編『ひつじ意味論講座5主観性と主体性』ひつじ書房49-67頁

上原聡(2002)「日本語における語彙のカテゴリ化—形容詞と形容動詞の差について—」大堀壽夫(編)『認知言語学Ⅱ・カテゴリー化』81-103頁 東京大学出版会

小本曾智信・中村壮範(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装 改訂版』文部科学省科学研究費特定領域研究

奥田智樹(2014)「日本語の副詞研究の展望」『応用言語学特殊研究a』1-16頁

加藤重広(2015)「形容動詞から見る品詞体系」『日本語文法』15(2) 48-64頁

北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店

北原保雄編(2011)『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店

工藤浩(2016)『副詞と文』ひつじ書房

国立国語研究所編(2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書

高木一彦(1997)「副詞と陳述詞—その意味構造について—」『大東文化大学紀要』35、125-143頁

竹内美智子(1973)「副詞とは何か」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 連体詞・副詞』明治書院72-146頁

別日本文法講座 連体詞・副詞と他品詞との関係』鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 連体詞・副詞』明治書院147-168頁

樹編『品詞別日本文法講座 連体詞・副詞』明治書院147-168頁

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

62-75頁

時枝誠記(1950)『日本文法 口語篇』岩波書店128-134頁
中右実(1980)「副詞の比較」国広哲弥編『日英語比較講座2
文法』大修館書店157-219頁

西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語
研究所報告44、秀英出版

西尾実・石淵悦太郎・水谷静夫・柏野和佳子・星野和子・丸山直子編(2
019)『石波国語辞典』第八版 岩波書店

西原鈴子(1991)「第二部 副詞の意味機能」『日本語教育指導参
考書19 副詞の意味と用法』国立国語研究所、大蔵省印刷局4
9-80頁

仁田義雄(1985)「文の骨組み―文末の文法カテゴリーをめぐつ
て―」『応用言語学講座1巻・日本語の教育』明治書院

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版

仁田義雄(2009)「第1章 現代語の文法・文法論」工藤浩ほか
著『改訂版 日本語要説』ひつじ書房1-30頁

橋本進吉(1948)「國語の形容動詞について」『橋本進吉博士著
作集第2冊 國語法研究』岩波書店98-130頁

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎的日本語文法 改訂版』くろ
しお出版

村木新次郎(2012)『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房

森田良行(2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版

八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点か
ら―』明治書院

芳賀矢一(1905)『中等教科明治文典』富山房

Backhouse, A.E. (1984) "Have All the Adjectives Gone?", *Lingua*
62:pp.169-186

Dixon, R.M.W. (1977) "Where Have All the Adjectives Gone?",
Studies in Language 11:pp.19-80

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』中納言2、4、5データページ
2021-03 (<https://chunagonninja.ac.jp>)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス語彙表』短単位語彙表データ
(https://jminjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/freq-list.html)

注

1 上原(2002)では、形容動詞の基本的意味の属する語のま
とまりを「意味クラス」と称している。

2 西原は、構文レベルで副詞をとらえており、「運悪く」のほか「困っ
たこと」なども副詞としているが、本稿ではこのような連用
修飾要素は「副詞」と区別して取り扱った。

3 「明日」の例は副詞を動詞の前に置き、連用修飾にすれば自然な
文になる(「明日、仕事がもつとある」)。

※本研究は2021(令和3)年度に提出した修士論文の一部である。

(愛知県立豊田南高等学校教諭 令和3年度修了生)